

解決志向アプローチにおけるカウンセラーとクライアントの応答一致性に関する研究¹⁾

潮 村 公 弘・高 橋 功

(フェリス女学院大学) (青森少年鑑別所)

概要

本研究は、カウンセラーとクライアントの応答一致性が、カウンセラーやカウンセリング状況に対する観察者の印象評定に及ぼす効果について検討した。カウンセラーの応答スタイル要因（感情志向型応答と認知志向型応答）と、クライアントの応答タイプ要因（感情的応答と理性的応答）の2要因（2×2）配置計画が設定された。実験の結果、応答一致性の効果は、認知志向型カウンセラーにおいて、感情的応答クライアントよりも理性的応答クライアントのカウンセリング状況が高く評定されることが認められた。カウンセラーとクライアントの応答一致性に関わる実践的な含意について考察された。

問題

カウンセリングが有効に機能するか否かを規定する要因の1つに、クライアントが有している特徴や状態とカウンセラーの介入との調和が指摘されており (Stoltenberg et al., 1986; 島本, 1996)、従来、さまざまなクライアント要因や、カウンセラー要因が検討されてきた。例えば、問題解決へ向けて感情的になっているクライアントに対しては感情の反映、言い換え、繰り返しなどで応答する非指示的なアプローチがクライアントの満足度を高めると評価され、また、感情的にならずに具体的な解決策を求めているクライアントに対してはカウンセラーの個人的意見や指示・質問などで応答をする指示的なアプローチがクライアントの満足度を高めると評価されている (島本, 1996)。また、クライアントがカウンセラーの話を聴き、検討しようとしているさいは、カウンセラーの言い換え、最小限の励ましよりも解釈を示す方が、気づきが得られると評価されることが示されて来ている (山本眞利子, 1996)。一方、クライアントの個人差特性である認

知スタイルを取り上げた研究では、意思決定時に論理的に考える傾向が強い思考タイプ (thinking types) のクライアントは、それとは逆の感情タイプ (feeling types) のクライアントよりも合理情動療法 (Rational-Emotive Therapy) への来談意図を高く評価している (Stoltenberg et al., 1986) ことも示されている。これらの研究は、カウンセラーの介入のさいにはクライアント側の要因を考慮することの重要性を示すものであり、この重要性は、短期療法一派である解決志向アプローチにおいて「セラピストとクライアント関係の在り方に治療的介入がフィットしていることが治療成功の鍵」(白木, 1994) として強調されている。

解決志向アプローチは、未来志向的でクライアントの強さや解決後の状況が取り扱われるなど、クライアントにとってなじみやすく、また治療者にとっても学びやすいモデルとの指摘 (鈴木ら, 2002; 入谷, 2003) がなされるものの、その一方で、解決志向アプローチに特徴的な質問にクライアントが応答しにくい場合があることも指摘されている (栗田, 2007; Ozeki, 2002; Shilts et al., 2003)。例えば、「奇跡が起きて」という前置きのもとで、解決後の状況を問うミラクル・クエッションに対して、クライアントが、見当違いと考えたり、「奇跡など信じられない」と応答したりすることがあるなど (Shilts et al., 2003)、問題の話から解決の話に転換することを目的とした質問が、問題について話をしたいクライアントを欲求不満にさせてしまうことがある (Ozeki, 2002)。

そこで従来、解決志向アプローチの質問に対するクライアントの応答の分析 (栗田, 2007) や、どの程度応答できるかどうかを査定する「会話様式」(Ozeki, 2002) の概念が提唱され、介入の効果を高めるためのクライアント要因として応答についての検討がなされている。クライアントの応答に着目したこれらの研究は、解決志向アプローチの質問に応答できるかどうかという観点から論じたものであるが、その一方で、クライアントの応答内容が感情的なものかどうかという観点も存在するであろう。すなわち、クライアントの応答には、問題に伴う感情に関する応答が多い場合 (以下、感情的応答クライアント) と問題そのものや問題への受け止め方に関する応答が多い場合 (以下、理性的応答クライアント) の2つのタイプが想定される。したがって、それぞれのクライアントに対するカウンセラーの応答志向性の一致という観点から言えば、解決志向アプローチの応答も、主にクライアントの感情に焦点を当てて伝え返す様式 (以下、感情志向型カ

ウンセラー)と、主に問題の認知の仕方に焦点を当てて伝え返す様式(以下、認知志向型カウンセラー)がクライアントの応答志向性に一致すると考えられる²⁾。

そこで、本研究ではそれら2つの応答スタイルを設け、カウンセラーの特性や来談意図への評定に及ぼす効果を検討する。また、カウンセリングなどの対人援助サービスへの援助を求めるかどうかの認知的枠組みである被援助志向性と自尊心特性の程度に関係があることが指摘されていることから(木村・水野, 2004; 脇本, 2008)、評定者の自尊心の程度がカウンセリング状況への評定に影響を及ぼすかどうかについてもあわせて検討する。

目的: クライアント側の要因として感情的応答クライアントと理性的応答クライアント、カウンセラー側の要因として感情志向型カウンセラーと認知志向型カウンセラーを設け、観察者によるカウンセリング状況への評定に及ぼす効果について検討する。そのさい、カウンセラーとクライアントの応答志向性の一致に関わる次の仮説を設定する。「感情志向型カウンセラーは、理性的応答クライアントよりも感情的応答クライアントとのカウンセリング場面で高く評価されるのに対し、認知志向型カウンセラーは、感情的応答クライアントよりも理性的応答クライアントとのカウンセリング場面で高く評価されるであろう」という仮説である。すなわち、カウンセラーの特性や来談意図に及ぼすカウンセラーの応答スタイルとクライアントの応答タイプとの交互作用効果について検証する。

方法

実験参加者: 大学1～4年生82名(男性19名、女性62名、性別未記入1名)が実験に参加した。回答に欠損値のあった4名を除外し、最終的に78名(男性18名、女性60名)を分析対象とした。

実験デザイン: カウンセラーの応答スタイル要因(感情志向型カウンセラー/認知志向型カウンセラー)×クライアントの応答タイプ要因(感情的応答クライアント/理性的応答クライアント)の2要因(2×2)配置計画であり、いずれの要因も実験参加者内要因として実施した。

刺激材料: カウンセラーの応答スタイルとクライアントのタイプの組み合わせから構成される4条件のカウンセリング場面を収録したビデオテープを刺激材料とした。カウンセラー役には4年の臨床経験を持つ臨床心理専攻の男性大学院生

に、クライアント役は臨床心理を専攻する男性大学院生にそれぞれ担当してもらった。場面のシナリオは、関連する先行研究での諸事例を参考にして、友人関係に悩む男子学生を想定して作成した。

手続き：教示に続いて、実験参加者はカウンセリング場面が収録された刺激材料を視聴した後に、カウンセリング場面に関する質問紙に回答する手続きを4回行った。

カウンセラーの言語的応答の操作：感情志向型、認知志向型の解決志向アプローチに基づくカウンセラーの言語的応答は、次のように操作した。「感情志向型カウンセラー」では、感情に着目した繰り返しや言い換え、感情に着目したフィードバック、解決後の感情に着目した質問、感情面に着目したコーピング・クエッション、感情面に着目した例外の質問、感情に焦点化したリソース追究の質問で応答を構成した。これに対し、「認知志向型カウンセラー」では、事実に着目した繰り返しや言い換え、事実に着目したフィードバック、解決後の状況に着目した質問、具体的状況に着目したコーピング・クエッションの質問、事実焦点化したリソース追究の質問で応答を構成した。

クライアントの言語的応答の操作：クライアントの毎回の応答は大きく3つのセンテンスから構成され、各センテンス内に肯定的または否定的感情語を含んで応答させるクライアントを「感情的応答クライアント」とした。これに対し、感情語を含まず、客観的事実や問題の受け止め方などで応答させるクライアントを「理性的応答クライアント」とした。

従属変数：従属変数が記載された質問紙を作成し、以下の項目により構成した。Johnson (1994) の面接評定尺度より、クライアントに対するカウンセラーの関心度、理解度、深さの3項目。織田・佐藤 (2003) を参考に、カウンセラーの共感度、非言語肯定度、来談意図の3項目。操作チェック項目として、カウンセラーの感情外の注目度、事実・状況の注目度、クライアントの感情応答度、事実・状況の応答度の4項目。また個人差特性として、自尊心尺度 (山本真理子ら, 1982) を取り上げた。

結果

操作チェック：各操作チェック項目 (4項目) を従属変数として2要因 (2 ×

2) 分散分析を行った。その結果、カウンセラーの応答スタイルの主効果が感情外の注目度 ($F(1,77) = 6.59, p < .05$) において認められ、感情志向型カウンセラーより認知志向型カウンセラーの方がクライアントの応答のうち、感情以外の客観的事実や状況に着目していたと評定された。

一方、クライアントの応答タイプの主効果は、感情応答度 ($F(1,77) = 13.87, p < .01$)、事実・状況応答度 ($F(1,77) = 8.76, p < .01$) で有意に認められ、感情的応答クライアントは理性的応答クライアントよりも感情を述べていたと評定され、また、理性的応答クライアントは感情的応答クライアントよりも感情以外の客観的事実や状況を述べていたと評定された。

クライアント側の操作は十分に有効であったことに対し、カウンセラー側の操作については、2項目の操作チェック項目のうち1項目に有意性が認められなかったことから、操作の有効性は限定的であった。

実験デザインに基づく分散分析結果：カウンセリング状況に対する各評定項目を従属変数として、カウンセラーの応答スタイル(2)×クライアントの応答タイプ(2)の2要因分散分析により検討した。その結果、有意な交互作用効果が非言語肯定度 ($F(1,77) = 23.43, p < .01$)、関心度 ($F(1,77) = 4.49, p < .05$) において認められ、共感度 ($F(1,77) = 3.49, p < .10$)、深さ ($F(1,77) = 3.20, p < .10$) において傾向差水準での交互作用効果が認められた(図1～図4)。

単純主効果検定の結果、以下に示す有意な単純主効果が示された。非言語肯定度(図1)では、感情的クライアント及び理性的応答クライアントにおけるカウンセラーの応答志向性の効果(ともに $p < .01$)、感情志向型カウンセラー及び認知志向型カウンセラーにおけるクライアントのタイプの効果(ともに $p < .01$)が認められた。関心度(図2)では、理性的応答クライアントにおけるカウンセラーの応答志向性の効果と、認知志向型カウンセラーにおけるクライアントのタイプの効果が認められた(ともに $p < .01$)。共感度(図3)では認知志向型カウンセラーにおけるクライアントの応答タイプの効果($p < .01$)、理性的応答クライアントにおけるカウンセラーの応答志向性の効果($p < .05$)が認められた。深さ(図4)においては感情的クライアント及び理性的応答クライアントにおけるカウンセラーの応答志向性の効果(それぞれ $p < .01, p < .10$)が認められた。

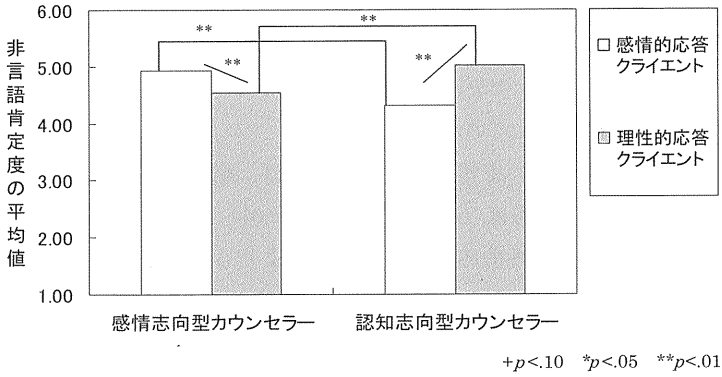


図1 非言語肯定度の交互作用効果

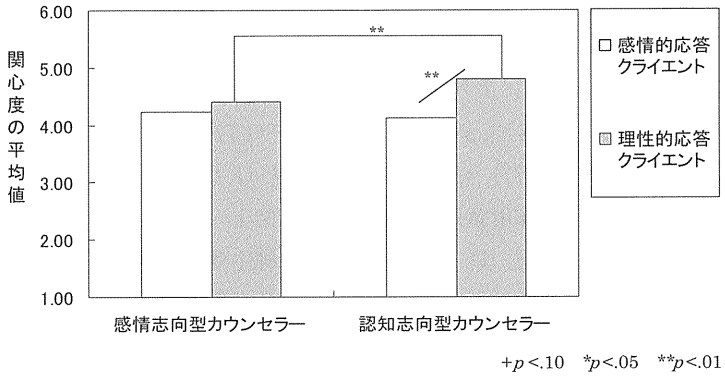


図2 関心度の交互作用効果

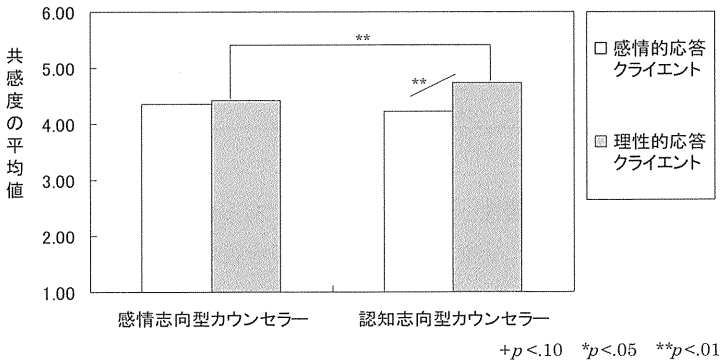


図 3 共感度の交互作用効果

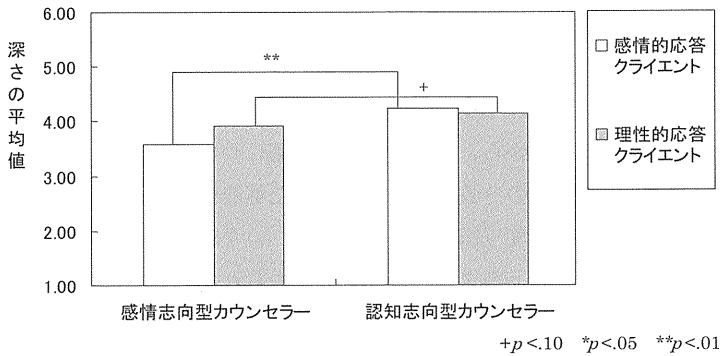


図 4 深さの交互作用効果

主効果については、カウンセラーの応答スタイルの有意な主効果が認められ、感情志向型カウンセラーよりも認知志向型カウンセラーの深さ ($F(1,77) = 19.41, p < .01$)、来談意図 ($F(1,77) = 8.06, p < .01$) が高く評定された (表 1)。

表1 カウンセラーの応答スタイルの主効果

	感情志向型カウンセラー		認知志向型カウンセラー		有意性 (<i>p</i>)
	M	(SD)	M	(SD)	
深さ	3.75	(0.12)	4.20	(0.09)	**
来談意図	3.54	(0.14)	3.84	(0.13)	**

p*<.05 *p*<.01

観察者の自尊心との関連性：個人差特性指標である自尊心得点について中央値分割を行い、高群、低群に分割した。各評定項目を従属変数として、カウンセラーの応答志向性(2)×クライアントの応答タイプ(2)×自尊心(2)の3要因分散分析により検討したところ、自尊心要因が関わる有意な効果は存在しなかった。

考察

カウンセラーの応答志向性とクライアントの応答タイプとの有意な（傾向差水準を含む）交互作用効果が非言語肯定度、関心度、共感度、深さにおいて認められたものの、仮説と一致する方向で効果が認められたのは非言語肯定度（図1）のみであった。このことから、非言語面での評価については、カウンセラーとクライアントの応答志向性の一致が影響を及ぼした可能性が考えられる。

関心度（図2）や共感度（図3）においては、いずれも感情志向型カウンセラーについてはクライアントのタイプの効果は認められないのに対し、認知志向型カウンセラーについては、感情的応答クライアントより理性的応答クライアントが高く評定された。また、理性的応答クライアントにおいては、感情志向型カウンセラーよりも認知志向型カウンセラーが高く評定された。これらの結果から、カウンセラーとクライアントの応答一致性の効果は、理性的応答クライアントにおいて感情志向型カウンセラーよりも認知志向型カウンセラーのカウンセリングが高く評定されるという点でのみ認められたと言える。

深さ（図4）においては、感情的応答クライアント、理性的応答クライアントともに感情志向型カウンセラーよりも認知志向型カウンセラーの場合の方が高く評定された。理性的応答クライアントの場合は仮説と一致する結果であるのに対し、感情的応答クライアントの場合は仮説とは逆の結果となった。本研究で用いた深さの指標は、カウンセリングが表面的だったか、新たな気づきを得るものだ

ったかについて問う項目であったことから、感情的になっているクライアントに対して、具体的状況に着目した解決志向アプローチの応答が、新たな気づきを生むものとして受け取られた可能性が考えられる。

これらの結果から、カウンセラーの非言語面の肯定度、共感度、関心度といった側面の評定には言語面の一致性が影響を及ぼしやすいのに対し、カウンセリングの深さの評定には、言語面の一致性よりもむしろ、応答が新たな気づきをもたらし得るかどうかの影響を及ぼしやすい可能性が考えられるだろう。

また、来談意図の主効果（表1）については、感情志向型カウンセラーよりも認知志向型カウンセラーが高く評定された。このことから認知志向型応答が大学生観察者にとっては受け入れやすいことが示された。ただし、本実験においてはカウンセラー側要因の操作の有効性が限定的であった点に留意が必要である。

最後に、本研究の意義と限界について述べる。まず、実験参加者が男性よりも女性が多く、性差の影響を排除できない点に留意を要する。また近年、クライアントが抱える問題の多様化（島本, 1996）が指摘される中で、解決志向アプローチは様々な臨床場面で用いられており、今後、解決志向アプローチを用いる臨床家が增加する可能性が指摘されている（伊藤, 2007）。それゆえ、特定のクライアントの状態を設定し、同じ解決志向アプローチであっても、異なる応答志向性でカウンセリングを展開した場合に、カウンセラーやカウンセリング状況に対してどのような印象の差異が生じるかについて検討することは、解決志向アプローチの技法をより有効なものにしていく上で重要であろう。しかし一方で、本研究は、観察者（非当事者）によってなされるカウンセリング場面の評価である点や、実験で用いた刺激がカウンセリングの導入場面である点などの制約がある。臨床場面への応用に向けて、実際のロールプレイを通じて、カウンセラーの言語方略とクライアントの状態との関連性を検証していくことも今後必要であろう。

要約

本研究は、カウンセラーとクライアントの応答一致性が、カウンセラーやカウンセリング状況に対する観察者の印象評定に及ぼす効果について検討した。カウンセラーの応答スタイル要因（感情志向型応答と認知志向型応答）と、クライアントの応答タイプ要因（感情的応答と理性的応答）を設定し、応答一致性の効果

に関する仮説について検証した。具体的には、感情志向型カウンセラーは、理性的応答クライアントよりも感情的応答クライアントにおいて、カウンセリング状況を高く評定され、また、認知志向型カウンセラーは、感情的応答クライアントよりも理性的応答クライアントにおいて、カウンセリング状況を高く評定されるという仮説について検証した。実験参加者は大学生 78 名(男性 18 名、女性 60 名)であり、両要因ともに実験参加者内要因で実施した。実験の結果、応答一致性の効果は、認知志向型カウンセラーにおいて、感情的応答クライアントよりも理性的応答クライアントのカウンセリング状況が高く評定されることが認められた。カウンセラーとクライアントの応答一致性に関わる実践的な探究の含意について考察された。

註)

- 1) 本研究は、第一著者の研究指導の下で行われた、第二著者による修士論文研究に基づいている。
- 2) 本来であれば、本研究はカウンセラーの応答に着目している点を強調し、「感情志向型応答」「認知志向型応答」とすべきであるが、クライアント側の要因での名称との混乱を避けるため、これらの名称とした。

引用文献

- 入谷好樹 2003 長期心理療法, 短期心理療法, およびゲシュタルト療法での治療仮説の比較
鳴門教育大学研究紀要, 18, 43-49.
- 伊藤 拓 2007 ソリューション・フォーカスト・アプローチにおける感情へのアプローチ:
その独自性とクライアントの感情軽視の危険性ブリーフサイコセラピー研究, 16, 109-118.
- Johnson, L. D. 1994 *Psychotherapy in the age of accountability*. Haddon Craftsmen, USA.
- 木村真人・水野治久 2004 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について: 学生相談・
友達・家族に焦点をあててカウンセリング研究, 37, 260-269.
- 栗田智未 2007 解決志向アプローチにおけるクライアント応答の質的分析: 実験的な面接場
面のデータを中心にブリーフサイコセラピー研究, 16, 19-29.
- 織田信男・佐藤正恵 2003 カウンセラーの属性評定に及ぼすカウンセラーの言語的・非言語
的行動の不一致と表象型と面接回数の効果について岩手大学人文社会科学部紀要, 73,
11-16.
- Ozeki, T. 2002 "Problems" as resources: A practical guide to addressing clients' description of their
problems in solution-focused therapy. *Journal of Systemic Therapies*, 21, 35-47.
- Shilts, L., Rambo, A., & Huntley, E. 2003 The collaborative miracle: When to slow down the pace of
brief therapy. *Journal of Systemic Therapies*, 22, 65-73.
- 高本淳子 1996 カウンセラーの応答の指示性と来談者の心的状態との適合性に関する実験的
研究カウンセリング研究, 29, 9-18.
- 白木孝二 1994 BFTC・ミルウォーキー・アプローチ 宮田敬一(編) ブリーフセラピー入門

金剛出版 Pp.102-117.

Stoltenberg, C. D., Pace, T., & Maddux, J. E. 1986 Cognitive style and counselor credibility: Effects on client endorsement of rational emotive therapy. *Cognitive Therapy and Research*, 10, 237-243.

鈴木英一郎・西村もゆ子・大杉真紀・高城絵里子 2002 短期療法（ブリーフセラピー）の効用と課題について 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 49, 113-134.

脇本竜太郎 2008 自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 47, 160-168.

山本眞利子 1996 クライアントのレディネス状態の違いにおける解釈がクライアント反応の評定に及ぼす影響 カウンセリング研究, 29, 1-8.

山本眞理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

Research on Counselor's and Client's Response Matching in Solution-Focused Approach

Kimihiro SHIOMURA
(Ferris University)

Isao TAKAHASHI
(Aomori Juvenile Classification Homes)

Abstract

The present study examined the effect of consistency/inconsistency in the response orientation of counselor and client on impression ratings by the observers toward the counselor and its counseling situations. The 2×2 factorial design was applied for this experiment; the counselor's response orientation (affection-oriented counselor vs. cognition-oriented counselor) and the client's response orientation (affective-oriented client vs. cognitive-oriented client). The seventy-eight university students (18 males and 60 females) participated in the experiment. The results showed that the effects of consistency in the response orientation were revealed in the cognition-oriented counselor, that is, in this counselor condition, the counseling situations toward cognitive-oriented client were positively evaluated than affective-oriented client by the observers. The involvements of practical exploration into a response matching between counselor and client were discussed.

Key words:

Solution-Focused Approach, Response Orientation, Clinical Counseling